

主 題：救いの本質と目的 ③

聖書箇所：エペソ人への手紙 2章10節

先週と先々週、私たちの救いは100%神様からの恵みである、と共に学びました。また、過去、現在、未来の救いがある、とも学びましたね。過去—義認（過去においてキリストの十字架によって罪が赦された）、現在—聖化（キリストに似た者と変えられ続けていく）、未来—栄化（未来において、この肉から解放されて栄光のからだを与えられて、天において主と共に座り、神様を賛美する者となる）このすべてが全体として救いであり、そしてそれが100%神の働きによって、神様の恵みによって成される、ということを知りました。

ただ正直な話をしますと、義と認められる、神様によって救われるということが神様の恵みであり、神様の働きであることはわかった。そして栄化、天に挙げられることも100%神様の働きによって成されるということも理解できる。ただ聖化という、この私たちのクリスチャン生活だけは少し違うのではないか？クリスチャン生活が100%神の働きによって成っていくの？私たちは100%神の働きによってキリストに似た者に変えられていくの？……何となく納得できないですね。どうもそこは私たちが頑張らなくてははいけないんじゃないか？私たちの働きも必要なんじゃないか？だって聖書には神様の命令がいっぱい書かれているじゃない。あれを私たちは守らなければいけないのでしょ？それをすべて100%神様の働きだと？ちょっと信じがたい……。

けれども、きょうも結論を先にお話しますと、答えは、そうなのです。クリスチャン生活も聖化の過程も100%神様の働きであり、100%神様の恵みなのです。逆に言うと、聖書を見れば、私たちが自分の働きや自分の力によって神様の義を達成しようとするときに、それを、神様は「罪だ」とおっしゃいます。イザヤ64：6bに書いてあるように「私たちの義はみな、汚れた着物のようです。」私たちが自分の力で義を達成しようとするときに、それは神様の前には「汚れた着物のよう」だと。では、どうしたら私たちはキリストに似た者に変えられていくのか、神様はいったいどのようにしてくださるのか、神様は何を約束して下さったのかを、きょう皆さんとともに学んでいきたいと思えます。最初にエペソ2：1-10をお読みします。

エペソ2：1-10

「1 あなたがたは自分の罪過と罪との中に死んでいた者であって、2 そのころは、それらの罪の中にあつてこの世の流れに従い、空中の權威を持つ支配者として今も不従順の子らの中に働いている霊に従って、歩んでいました。3 私たちもみな、かつては不従順の子らの中にあつて、自分の肉の欲の中に生き、肉と心の望むままを行い、ほかの人たちと同じように、生まれながら御怒りを受けるべき子らでした。4 しかし、あわれみ豊かな神は、私たちを愛して下さったその大きな愛のゆえに、5 罪過の中に死んでいたこの私たちをキリストとともに生かし、——あなたがたが救われたのは、ただ恵みによるのです——6 キリスト・イエスにおいて、ともによみがえらせ、ともに天の所にすわらせてくださいました。7 それは、あとに来る世々において、このすぐれて豊かな御恵みを、キリスト・イエスにおいて私たちに賜る慈愛によって明らかにお示しになるためでした。8 あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。9 行いによるものではありません。だれも誇ることはないためです。10 私たちは神の作品であつて、良い行いをするためにキリスト・イエスにあつて造られたのです。神は、私たちが良い行いに歩むように、その良い行いをもあらかじめ備えて下さったのです。」

まず始めに、この2：10はおもに二つのポイントに分けることができますと思います。一つは、「私たちは神の作品として造られた」ということ、二つ目は、「私たちは良い行いをも備えられた」ということです。

1. 私たちの現実—その1：神の約束 10節

1) 神の作品として造られた

「私たちは神の作品」として造られた、この「作品」ということばは、ギリシャ語を見ても新約聖書には2回しか出てきません。一つはこの箇所、もう一つはローマ1：20「神の、目に見えない本姓、すなわち神の永遠の力と神聖は、世界の創造された時からこのかた、被造物によって知られ、はっきりと認められるのであって、彼らに弁解の余地はないのです。」この「被造物」ということばに、2：10の「作品」と同じことばが使われています。ですから、私たちは神様によって造られた作品だということです。でもそれは、私たちがクリスチャンになった時に、このからだをすべて造り直されたわけではありませんね。これは、神様が私たちを霊的に新しく造られた、ということを示しています。神様は私たちを、霊的に“再創造”してくださったのです。しかも、実はこの10節の最初には「彼」ということばが出てきます。「彼」は神様を指します。パウロは、神が私たちを造られた、と強調したかったのです。神様がキリストのうちに私たちを造られたのです。またⅡコリント5：17-18にも同じことが書かれています。「だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。」この後18節「これらのことはすべて、神から出ているのです。」と。神様が私たちを再創造してくださったのです。つまり、被造物が造られた時、被造物は何もしていませんね。被造物は神様によって造られました。私たちも霊的に新しく造られた時に、私たちは何もしていないということです。

ヨハネ3章で、イエス様がニコデモと話された時、まさしくイエス様はそのことをおっしゃいました。ヨハネ3：7a「あなたがたは新しく生まれなければならない」3：3b「人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。」私たちは新しく生まれなければ、神の国に入るところか、神の国を見ることすらできないと。まさしくそのことを話していたのです。ニコデモは律法学者の中でもリーダー的な存在でした。彼は旧約聖書をよく知っていたのです。ですから、先週私たちが学んだあのエゼキエル36、37章の記事も知っているのです。神様が私たちの心から石の心を取り除いてくださり、肉の心を与えると学びましたね。神様はただ単に死んでいるだけでなく、骨になっているだけでなく、それも干からびた骨から、神様は新しいいのちを与えられましたね。それをニコデモは知っているはずですが。ところが彼はイエス様のおっしゃっていることが理解できなくて、「えっ！もう一度、母の胎に戻るといいますか？」とイエス様に質問しているのです。しかし先週学んだように、私たちがこのように新しく生まれ変わらせられたのは、私たちがその救いを通して神様の恵みを証しするため、だったですよ。

2. 良い行いをも備えられている

「神様は良い行いをも備えられている」まさしくきょうの結論です。この「備えられている」ということばも珍しくて、実はこの箇所とローマ9：23にしか出てきません。「それも、神が栄光のためにあらかじめ用意しておられた……」この「あらかじめ用意しておられた」に2：10の「あらかじめ備えてくださった」と同じことばが使われています。このローマ9：23の記事は、先週学んだ9：19「……なぜ、神は人を責められるのですか。だれが神のご計画に逆らうことができますでしょう。」という9章の記事の最後に出てきます。神様のその救いは、「それも、神の栄光のためにあらかじめ用意しておられたあわれみの器に対して、その豊かな栄光を知らせてくださるためなのです。」と。そしてこの2：10「神は、私たちが良い行いに歩むように、その良い行いをもあらかじめ備えてくださったのです。」つまり、私たちの歩みを通して神様の恵みの栄光がほめたたえられるためなのです。このエペソ2：10の「備えられた」というの

も、ローマ9：23「あらかじめ用意された」というのも両方とも、主語は「神」です。つまり、神様が栄光を現すためにそれを成してくださった、ということです。……わかった。私たちが過去に救われたのも100%神様の働きであり、神の恵みなんだな。なるほど聖書に書いてあるから否定はできない。じゃ、私たちのクリスチャン生活も100%神様の働きなんだな……と。

2. 私たちの現実—その2：私たちが置かれている現状

ではお尋ねします。この神様の約束と、今の私たちの現状のギャップはどうしたらよいのでしょうか？神様は良い行いを備えてくださると約束されているのに、今の私たちの現状は、決して「そうです！」と言い切れないのではないですか？私たちは、良い行いをも備えられていて、その良い行いに歩むためにも神様が私たちを導いてくださると約束してくださっていますね。

ところが、私たちのクリスチャン生活の中での一番の問題は、その良い行いを自分の力でしようとする点にあります。自分の働きでその良い行いをしようとするのです。ないですか？僕（ぼく）はものすごく苦しんだほうなので……。今も苦しんでいます。この中の一番の問題児は、僕だと思っています。だから僕は毎日毎日神様のあわれみを祈り求めているのですが……。でも皆さんご存じのように、僕は牧師の子どもとして生まれたので、生まれた時から教会にいるわけですけども。神様に正しく歩むために、ある意味ありとあらゆることをしました。聖書も一生懸命勉強しました。神学も学びました。うちの父親はスパルタでしたから、小学校の時から週に一度、神学の個人授業があったんです。中学の時にはルイス・S・シェイファーの書いた“聖書の主要教理”という本一冊全部終えました。暗唱聖句の宿題もありました。高校の時には、ヘンリー・シーセンという人が書いた“組織神学”も父から学びました。毎週の個人授業、暗唱聖句も伝道も一生懸命しました。いろんな活動もしました。でも、一番私にとって問題だったのは、神と関係がなかったのです。でも多くの人が自分の力でそれをしようとしているのです。そこには大きな壁がたくさんあるのです。

私たちは2：1から救われる以前の状態を学び、2節には「この世の流れに従い」とありました。私たちは救われた時にこの世から救い出されるわけではなく、今でも「この世」の中で生きています。「この世」は、神の反抗の非常に強力な力です。そうじゃないですか？私たちはそれに囲まれて生きています。正直な話、家族にも友人にも職場にも学校にも、どこにでも「この世」は存在します。それだけではないですね。私たちが見るもの、テレビだろうがインターネットだろうが、非常に邪悪です。思いませんか？私たちが聞くもの、ラジオを通して音楽でも、私たちが読む新聞だろうが雑誌だろうがインターネット……。ありとあらゆるものが、神に反抗しています。2節に書かれている「**空中の権威を持つ支配者**」であるサタン。「この世」の主（あるじ）はサタンです。そのサタンはありとあらゆる力を使って、私たちの目を神様から逸らせようとします。それにはある意味、自分の力で教会生活を送る、ということも含まれています。どんな力を使ってでも私たちが神様から目を離すことができれば、サタンの勝ちですから。あらゆる力を使ってサタンは伝道をも妨げます。Ⅱコリント4：4「**そのばあい、この世の神が不信者の思いをくらませて、神のかたちであるキリストの栄光にかかわる福音の光を輝かせないようにしているのです。**」私たちが伝道をするときに、その妨げをしようとするのもサタンです。

それだけでなく、私たちはこの「肉」からもまだ解放されていません。「肉」というのはこの肉体だけではなくありません。私たちの意識、願い、私たちの存在もすべて含まれます。Ⅰヨハネ2：15で挙げられるのですが、15－17節「**15 世をも、世にあるものをも、愛してはなりません。もしだれでも世を愛しているなら、その人のうちに御父を愛する愛はありません。：16 すべての世にあるもの、すなわち、肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢などは、御父から出たものではなく、この世から出たものだからです。：17 世と世の欲は滅び去ります。しかし、神のみこころを行う者は、いつまでもながらえます。**」と。このⅠヨハネというのは、アジアの諸教会に向けて書かれた手紙なのですが、ここで「**世をも、世にあるものをも、愛してはなりません。**」と現在形で書いているということは、その諸教会の中にも自称クリスチャンでいながらも

世を愛している人がいた、ということです。「……だれでも世を愛しているなら、その人のうちに御父を愛する愛はありません。」つまり、世を愛している人はクリスチャンではない、とヨハネは明確に書いています。

この「肉の欲」とは何かというと、一番のポイントは、「内側から」ということです。「人から出るもの、これが、人を汚すのです。」マルコ7：20に書いてあります。私たちの内側から出てくるもの、そして、その内側から出る欲を自己中心的な方法で満たそうとすること、それが「肉の欲」です。つまり、神からではない方法で満たそうとすることです。自己中心的な方法で満たそうとすること、自己満足させようとするということです。「目の欲」は逆で、外側から来るものです。「外面だけを見て、自分の欲求を満たそうとすること」それが「目の欲」です。本質を見ずに、外側だけを見て、そして自分の欲求を満足させようとするということです。「暮らし向きの自慢」は、私たちの持ち物であったり、私たちの功績、成したことなどを自慢し傲慢になることです。もっと言うなら、やがて消えてなくなる物に価値や安心感を見出し、それに依存する態度です。神に依存せずに、物や自分の功績に依存するのです。そのようなものは、やがて消えてなくなりますよね。永遠のものではないでしょう？でもそれに価値を見出し、安心感を見出し、依存していくのです。この世の人たちそのものじゃないですか。

そして、私たちにとって複雑なのは、「この世」と「サタン」と「私たちの肉」が三つ巴となって私たちに戦いを挑んでくることです。非常に巧妙です。この世の中で私たちが生きていくときに、私たちが神様から目を逸らせようとする力は、非常に巧妙です。それは、私たちが良いと思っているものにも含まれるからです。例えば、皆さんの中には「私はテレビも見ないし、見るとしてもニュースぐらい。聴く音楽にも気をつけているし、読むとしても新聞ぐらい。気をつけています。」と言われる方もいるでしょう。でも私たちが良いと思っている、例えば民主主義とか、国民主権とかは、聖書的なアイデアではないですよね。民主とはだれが主？主権とはだれが主権者？（聖書を見ればわかりますが）巧妙に私たちの目を神様から逸らせようとする、そんなことに時間やお金をささげようとするのです。ボランティア活動もそうじゃないですか？地震の際にもボランティア活動をしている人たちは称賛されたりします。この世ではとても良いことです。非常に犠牲的なことです。ある人は人のために自分のいのちをささげることがあるかもしれない。

でも、ここで「……世を愛しているなら、その人のうちに御父を愛する愛はありません。」という、この「世を愛している」の「愛」には“アガペー”の愛が使われています。“アガペー”の愛は、意志と犠牲を伴う愛です。意志とは、目的や知的さを伴った態度です。犠牲というのは、何かに、より価値を置く態度です。そうすると、この「世を愛している」＝「世をアガペーの愛で愛している」ということは、自分の頭で考えて自分の意志でもって、神よりも世に価値を見出して、神よりも世を重んじて愛する態度です。そこには、神の栄光も神を愛することもありません。そうすると、この世の中でどんなに尊いと思われることであつたとしても、それが神の栄光のためになされず、神を愛することから出てこないのであれば、それは、罪です。強烈でしょ？聖書の言ってることは。なぜなら、そこに神様の栄光は現されないからです。「……食べるにも、飲むにも、何をするにも、ただ神の栄光を現すためにしなさい。」

（Iコリント10：31）と書いてあるじゃないですか。僕は2年半、崇志長老と一緒にIヨハネを学んでいるのですが、これは否定できない、明確にみことばが言っているというのは、これなんです。

「神の栄光を現さないものは、すべて罪なのです。」と。どんなに良いことであつても、どんなに尊いと思われることであつたとしても……。

そうすると、私たちの目を神様から逸らせようとする、ものすごく巧妙な中であつて、私たちはどうやって神様に従って、キリストに似た者に変えられていくのか？つまり、私たちが自分の力でもって神様に従っていこう、自分の力でもってキリストに似た者に変えられていこう、自分の力でもって神様に正しく歩んでいこうと思うときに、それも、神様から目を逸らしていることなので、罪なわけでしょ？

だから、神様はそれを、「汚れた着物のよう」だと言って、忌み嫌われるわけでしょ？律法学者たちは、そうだったでしょ？私たちは律法学者を批判するけれど、自分自身もクリスチャン生活を歩んでいる時に、いつの間にか似たようなことをするのです。一生懸命聖書を読み、暗唱聖句もし、毎週礼拝に来る。でも、そこに神がおられない。何でみことばを読むのですか？神と関係を持ちたいから、神を知りたいからでしょ？でも、その神様を除けてしまえば、どれだけ暗唱聖句をしても、どれだけみことばを学んでも、それは罪ですよ。だって神様を除けているから。表向きは正しく見えても……。では、どうしたら私たちは神様に従っていくことができるのでしょうか？

3. 私たちの現実—その3：では、神は如何にして約束を成してくださるのか？

「神様は私たちのために良い行いを備えてくださった。私たちは神様の作品であって、良い行いをするためにキリスト・イエスのうちに造られた。」と。この神の約束、これはまさしく神の前の聖い歩みですよ。何でそういうことが言えるのか？例えばこのエペソは、1-3章までは神学的なことが書かれていて、4-6章までは実践的なことが書かれていると言いましたね。同じようなことがローマ書でもあります。ローマ1-11章までは、神様が私たちに成してくださった祝福とその事実、もっと言えば神学的なことが書かれています。12章からは実践的な命令がたくさん書かれています。12:1にはこう書いています。「そういうわけですから、兄弟たち。私は、神のあわれみのゆえに、あなたがたにお願いします。あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげなさい。それこそ、あなたがたの霊的な礼拝です。」「聖い、生きた供え物としてささげなさい。」と。もう一つ私たちが学んでいるエペソ1:4には「すなわち、神は私たちが世界の基の置かれる前から彼のうちに選び、御前で聖く、傷のない者にしようとされました。」と。聖く歩むために、神様は私たちに救ってくださったのですね。

ではこの「聖い」とは、どういう意味なのでしょう。例えばエペソ1:1に「神のみこころによるキリスト・イエスの使徒パウロから、キリスト・イエスにある忠実なエペソの聖徒たちへ。」と書いてありますね。この「聖徒」という言い方、これは、私たちクリスチャンのことを指すのです。私たちはよく“クリスチャン”と言うけれど、新約聖書を見ると“クリスチャン”ということばは3回ほどしか出てきません。むしろ、この「聖徒」ということばがたくさん出てきます。私たちはみな「聖徒」だと言うのです。でも「聖徒」と言われると、ちょっと……。そんなに聖くはないのですが……。と思いませんか？「聖い」と聞くと、まず道徳的な聖さを思い浮かべるでしょう。そうすると「聖徒の皆さん、あなたは聖徒です。」と言われると、正直少し恥ずかしく感じるでしょう。僕だけですか？

この「聖い」ということばの元々の意味は、「分離する」「切り分ける」「切り離される」という意味があります。つまり、「聖い」は、道徳的な聖さを表してはいないとは言っていません。道徳的な聖さを表す前に、この「聖い」ということばには、分離するとか、切り分けるとか、切り離される、切っけて分けられるという元々の意味が、まずあるのです。私たちは何から切り離されたのでしょうか？なぜ私たちは「聖徒」と呼ばれるのでしょうか？この世から切り離されて、神と関係を持つ者になったのです。そして、この世から切り離されて、キリストと共に生きる者となったのです。だから、私たちは聖徒なのです。道徳的な性質よりも、切り離されて新しい関係を築くことが「聖い」というこの概念は、旧約聖書からずっとあるのです。例えば旧約聖書を見ると、神殿も聖いとあるし、神殿の中で使われている器具も聖い、安息日も聖いとされます。神殿や器具や安息日が道徳的に聖いとは思いませんね。おかしいでしょ。だから、切り離されたのです。神のために用いられたり、民のために用いること、安息日はいろんなものから特別に切り離して「聖」として定められたのです。

例えばイスラエルの民もそうじゃないですか。申命記7:6「あなたは、あなたの神、【主】の聖なる民だからである。あなたの神、【主】は、地の面のすべての国々の民のうちから、あなたを選んでご自分の宝の民とされた。」すべての国々の民のうちから、神様はイスラエルを選ばれて、聖いものとされた。神と関係ある民とされたのです。だからイスラエルは聖いものとされたのです。でも、イスラエルはいっぱい

悪いことをしているでしょ？僕らも人のことは言えませんが……。では何でイスラエルは聖いのか？それは、神に選ばれて神と関係を築いたものだからです。

先ほどから「聖い、聖い」と話していますが、いったい何が言いたいかというと、私たちが神と新しい関係に入れられたのが、「義認」＝救いです。そして、私たちがその神様とより深い関係を築いていくのが「聖化」＝私たちのクリスチャン生活です。そして、やがて私たちはこの肉から解放されて、栄光のからだを与えられて、神と完全な関係を結ぶ＝「栄化」です。これら全体を通して「救い」でしょ。だから「救い」というのは、神との関係です。神との関係に入れられ、神との関係を深めていき、それにより、結果私たちは聖くなっていき、そして、やがて神と完全な関係を与えられることにより、永遠に天の所でキリストと共に座り、神を礼拝する。だからローマ12：1の続きの2節にこう書いてあります。「この世と調子を合わせてはいけません。いや、むしろ、神のみこころは何か、すなわち、何が良いことで、神に受け入れられ、完全であるのかをわきまえ知るために、心の一新によって自分を変えなさい。」この「この世と調子を合わせてはいけません。」の「調子を合わせ」というのは、「一致する」とか「従う」という意味があります。「この世と一致してはいけません。この世に従ってはいけません。いや、むしろ、……わきまえ知りなさい。」この「わきまえ知る」とは、チェックしてテストして、承認できるかどうかを吟味しなさいということです。

それがするために私たちはどうすればよいのでしょうか？何が良いことで、神に受け入れられるかどうか、私たちはどうやってわかるのでしょうか？それは、神との関係においてですよね。だから私たちはみことばを読むんじゃないですか？だから私たちはクリスチャンと交わりをするわけでしょ？それは神様との関係があるからでしょ？神様とより関係を結びたいからですよね。何が神に喜ばれるか、わきまえ知りたいたいからです。

そして「心の一新によって自分を変えなさい。」これは皆さんご存じだと思いますが、これは、受け身の形が使われています。つまり「変えられなさい」、しかも現在形なので「変えられ続けなさい」です。つまり、私たちを変えるのは、神なのです。私たちは、神とより深い関係を結びたいと思って、キリストと共に歩むときに、もっともっと神様を知りたいので、みことばを学びます。クリスチャンと交わりをします。神様を礼拝しますよね。その中であって、神が、私たちを変えてくださるのです。私たちは何とか自分の力によって、このクリスチャン生活を間違いのないように、正しく見えるように、一生懸命頑張ることにフォーカスを当てるのではなくて、私たちの目を向けておかないといけないのは、神様なのです。その神様と共に歩いていくうちに、もっと神様を知りたいなとみことばを読み、神様と交わりを持ちたいなと祈り、あふれ出てくるものがあるから神様を賛美し、だからこそ礼拝に行き、そこでクリスチャンたちと交わり、そしてその中であって、神様は私たちをキリストに似た者に変えてくださるのです。なぜかと言うと、コロサイ3：10「……新しい人は、造り主のかたちに似せられてますます新しくされ、真の知識に至るのです。」3：11「……キリストがすべてであり、すべてのうちにおられるのです。」私たちがキリストと共にいるときに、私たちはキリストに似た者と変えられていくのです。それが、私たちが「聖化」と呼んでいる過程なのです。そこに私たちの努力や気合や私たちの働きとかは、入ってこないのです。それらは罪じゃないですか。だって自分の力でどうやって神様の基準を満たすのですか？満たせると思っていること自体が間違っていますよね。だから私たちには救いが必要だったわけでしょう？だから私たちには、キリストの十字架が必要だったのです。それと同じように私たちがクリスチャン生活を歩むときも、私たちの力ではないのです。私たちはいつも神様を見ていればいいのです。いつもキリストと共にいればいいのです。神様が愛してくださる、その一方的な愛だけではなくて、私たちも神様を愛していくのです。だって神様と関係を結ぶのでしょうか？一方的な関係ではないでしょうか？神様は私たちを愛してくださいますが、私たちも神様を愛するのです。神様は私たちと共にいてくださると約束していただきましたが、私たちも神様と共にいたいのです。神様は私たちをご存じで

しょ？髪の毛の数さえ知っておられる。だから、私たちも神様のことを知りたいのです。だから、聖書を読むのです。神様を抜きにして、私たちがどれだけ努力を重ねても、私たちは絶対にキリストに似た者には変えられていきません。

ある人が教会の中で、ある罪に悩んでいました。何とかその罪を克服したいと一生懸命努力したのです。それで、その罪を克服しました。それは表に見える罪でしたので。でも教会には、彼が悩んでいた同じ罪を犯している人がほかにもいたのです。彼はその人のことを「あの人は、救われていないんじゃないか？」と言ったのです。それは、彼が自分の力でその罪を犯さないようにと努力したからでしょ？そうすると、一見罪と見えるものを彼は克服したかもしれないけれど、また別の罪を神様の前に犯しているでしょ？“傲慢”という。

私たちが本当に神様を好きになって、神様と共に歩んで、神様の力によって変えられるときに、何よりも一番驚くのは、自分自身じゃないですか？自分の力によって私たちは変わっていったいない、神様が私たちを変えていってくださっている……それはある意味驚くことですね。子どもが小さい頃、教会学校から家に帰って来て「パパ、すごいよ！神様は紅海を真っ二つに分けたんだって！すごい？」と僕に言いました。「わかっているよ。でももっとすごい奇跡をお父さんは見てるんだ。神様は、お父さんの罪の心を変えていってくださっているんだ！これがどれだけすごいことか、自分自身が一番よくわかる！」と。だから、私たちが神様に正しく歩んでいるときに、「あの人は救われていないんじゃないか？」などという発言は出てきませんか？そこには、自分を誇っている心があるじゃないですか？俺は頑張ってるぞという……。私も正直、つい言ってしまいがちですが。皆さん、ないですか？でも、「誇る者は主を誇れ」（Iコリント1：31）ですよ。私たちが自分の力ではなくて、神様の力によって変えられていっていることを自分自身が見るときに、私たちは自分を誇る心は出てこないですよ。罪を犯している兄弟がいたときに、その人のところにどういう心で行きますか？「何ていう罪を犯しているんだ！」と行きますか？冗談じゃないですよ。だって、自分だって罪人なんですから。そうしたら、その人のところに行くときには、「そこじゃないよ！あなたが喜びを見出すところは、そこじゃないよ！もっとすごいものが、あなたに与えられているでしょ？そこに目を向けようよ！神様の恵みに目を向けよう！神様と共に歩もうよ！」と。でしょ？だから、私たちは何よりも自分自身に、毎日毎日福音を語り続けなければならないのです。福音が必要なのは、私たち自身なのです。

では、福音を語り続けるとは具体的にどういうことなのかを、皆さんと一緒に考えたいと思います。例えば、神様が私たちに与えておられる重要な戒めとは何ですか？二つありますね。主を愛することと、隣人を愛することですね。では、それを福音に基づいて、私たちはどのようにして実践していくのでしょうか？私たちはどうやって神様を愛することができるのでしょうか？エペソ5：1-2を見ると「:1 ですから、愛されている子どもらしく、神にならう者となりなさい。:2 また、愛のうちに歩みなさい。キリストもあなたがたを愛して、私たちのために、ご自身を神へのささげ物、また供え物とし、香ばしいかおりをおささげになりました。」私たちが神様の愛を知ることによって、私たちは神様を愛していくことができるわけですね。でも、私たちはそれをわかっていながら、神様を愛する生活をするとわかっていながら、私たちはいろんなところで失敗を犯すじゃないですか？例えば不平・不満を漏らしたり、不安を持ったり、時には神に対しての怒りを持つなどということも……。ないですか？自分の心の奥底に押し込んでいる、くすぶっている火種のようなもの。ないですか？私はありますよ。そういう罪と戦いますよ。いつも不平不満や不安が襲ってきますよ。いろいろな状況を見て、自分の力では克服できないような問題が見えたとき、自分には納得できないようなさまざまなことが起きたとき、これが神様に正しいはずだと思っても、それが成されていかないのを見るときに、「神様、どうしてですか？」と……。

そういうときに私たちは学ぶのです。神様は主権者であり、神様は支配者であられ、神様はすべてに最善を成しておられる。それを私たちが知って、神様に信頼を置いていくわけなのですが、では、福音

を基にしてそれを考えていくときに、どういうふうになっていくか？それは神様の愛を知ることによって、神様は単なる主権者ではなくて、私たちを愛してくださる主権者なのです。神様は単なる支配者ではなくて、神様は私たちを愛して下さっている支配者なのです。神様はただ単に最善を成される方ではなくて、私たちを愛しておられるからこそ最善を成されるのです。私たちには理解ができないことがいっぱいありますよ。私たちにはこの頭で納得できないことがいっぱいある。でも、私たちが神様によって愛されていることを私たちが知る時に、私たちはその神様の最善に信頼を置くことができるわけじゃないですか。

昨夜、自分の救いを考えていて、恐ろしくなるというか……。そういえば昔こんな祈りを神様にしたな、と思い出したことがありました。「神様は完全な方だと僕は知ってはいますが、ひょっとしたら神様は一つ大きなミスを犯されたんじゃないですか？何で私なのですか？ほかの人はわかります。みんな正しい立派な人だから。でも、何で神様は私を選ばれたのですか？何で私を救ってくださったのですか？自分ではよくわかりませんが……。」なぜかと言うと、自分にとって一番ふさわしいのは地獄だと思っていたから。いや、今でも思っています。もし神様が「やっぱりお前は地獄だ。」と言われたら、何も言い返せない。100%「はい、Yes, sir」と言って、行きます。それほど自分は地獄にふさわしいと今でも本当に思っています。そんな自分に、何で神様は目を留めてくださって、救ってくださったのか。神様は間違いを犯されたんじゃないですか？神様はわかっておられるでしょう？見てください、私ですよ。何で神様はこの私を救ってくださったの？何で神様はこの私を選ばれたの？……。その神様の愛を覚えるときに、私たちには理解できない、納得できないいろんな困難がある時にあっても、この私を愛してくださった、この私を救ってくださった神様が、愛のうちにあって最善を成され、愛のうちにあって主権者であられることを覚える時に、私たちは神様に信頼を置こうとするのです。

例えば、神様は確かに「隣人を愛しなさい」（マタイ22：39）と命令されています。でも私たちがその隣人を愛そうとする時に、非常に困難を覚えることがあります。皆さん、ないですか？この教会の中にも、どうもこの人とは合わない、愛せないと思う人はいませんか？それで何とかしようとするのです。自分が気に入る好きな人とだけ交わっていたらいけないと思って、その人のところにも行って、「おはようございます」と挨拶します。でもその人がスーと素通りしたなら、正直プチッときませんか？でもね、その時、思い出しませんか？私たちが神様に愛された時に、私たちは神様のことを見ようとしなかったのですよ。私たちは神様を無視していたのです。その段階で神様は私たちを愛してくださったのです。それどころか、私たちは神様に敵対する者でした。私たちは神の敵だったのです。その段階で神様は愛してくださったのです。だから、私たちがその愛を知った時に、自分に合わないと思う人でも、愛さないという選択肢はありません。もっと言えば、福音からそれを見た時に、あなたが愛せないと思っている相手をも、神様は愛しておられるのです。あなたが愛せないと思っている相手のためにも、神様は十字架にかかって死なれたのです。神様が私を愛されたように、神様はその人も愛しておられるのです。そして、そこで神様は「愛し合いなさい」と命令されているのです。だから、私たちがこのように神を愛するとか、隣人を愛するというのを考えただけでも、私たちはクリスチャン生活の問題というのを、すべて福音を通して解決できると知るので。福音をより理解することによって。だから、「福音を毎日毎日自分に語りなさい」ということは、その「福音を唱えなさい」と言っているのではなく、「福音の内容を吟味しなさい、そして、噛み砕いて飲み込んで、自分のものにしなさい」という話をしているのです。そのためにも、みことばが必要ですよ。そのためにも、みことばを読まないといけないですね。そのためにも、クリスチャンとの交わりも必要じゃないですか？私たちの知らないことを教えてもらえるじゃないですか？そして私たちが神様を賛美している時も、その賛美を通して教えられることもいっぱいありますでしょ？

このエペソ2：10「私たちは神の作品であって、良い行いをするためにキリスト・イエスにあって造られたのです。」この「作品」ということばは、当時は王様が被る王冠を指していました。腕利きの職人が腕によりをかけて王のために作った王冠、それを指す単語でもありました。つまり「傑作品」とか「芸術品」という意味が含まれます。何が驚くべきことかと言えば、私たちが神の作品だということです。私たちは神の芸術品であり、傑作品だと。神様は私たちが造ってくださった。新しいいのちを持つ者として、良い行いに歩むために。この世から切り分けられて、キリストと共に生きる者として、神様は私たちが造ってくださった。これが、神様が私たちに与えてくださった福音です。これが、私たちが生きるべき福音です。私たちはこの福音に生きなければなりません。きょう賛美しました。（聖歌593番）
♪罪に満てる世界　そこに住む世人に　いのち得よとイエスは　血潮流しませり　ああ恵み！　測り知れぬ恵み　ああ恵み！　我にさえおよべり♪　罪に満てる世界の中にあって、いのち得よとイエスは血潮を流してくださった。それが、我にもおよんだ。何たる恵み！

今週も皆さん、ぜひ毎日毎日この福音をご自身に語り続けてください。その時に驚くべきことは、あなたを通して、神様はこの恵みのすばらしさを証ししてくださいます。私たちを通して、私たちは神様の恵みの栄光を語り告げることができるのです。